特集2 解題

都市空間の再編とジェントリフィケーション

Gentrification and the Restructuring of Urban Space

下村恭広

Yasuhiro SHIMOMURA

この特集は、第33回大会におけるテーマ部会「都市空間再編とジェントリフィケーション」（2015年9月13日）での三つの報告に基づく論文で構成されている。はじめに、この企画の経緯について振り返っておきたい。この数年のシンポジウムやテーマ部会では、大都市圏における人口の都心回帰とその政治的含意について議論が続いている。前回大会のシンポジウム「都市中間層と居住空間の再編」（2014年9月12日）は、都心回帰について都市中間層の居住選択と関わらせて捉え、社会階層的な視点の導入を試みた。この時に居住空間の再編についていくつかの論点が出されたが、なかでもジェントリフィケーションにはたびたび言及がなされ、それをどのように理解すべきか論じられている。これを通じて浮かび上がった課題のひとつが、「欧米のジェントリフィケーションと日本でジェントリフィケーションと呼ばれる現象において、何が同じで、何が違うのかをきちんと実証する必要性」[原田 2015：4]である。本特集の元となったテーマ部会の企画は、この時のフロアからの問題提起への応答として始まった。

本特集で藤塚論文が示している通り、ジェントリフィケーションは英語圏を中心に広く国際的に共有され、研究蓄積の進んだテーマである。それに対して日本の都市社会学では、本特集の高木論文が振り返るように個別の調査研究があるにもかかわらず、学会として十分な検討を与えられてきた概念とはいえない。ひとまずこのテーマを、特定の地域の住民が居住環境の改善を伴いつつより高い社会階層へ入れ替わっていく過程を批判的に捉える試みであり、それが生じる要因について政治経済的あるいは社会文化的な観点から分析しようとするさまざまなアプローチを包括するものとしておこう。テーマ部会ではこの概念が提示している視角について確認し、この概念を用いることで現在の都市で進んでいる過程の理解がより深まるのか、またこれまでの対象の捉え方がどのように変わりうるのか、都市研究におけるその意義について明らかにすることを目指した。

当日は第一報告として藤塚吉浩氏（大阪市立大学）から、地理学の立場で国際的な研究蓄積の概略と、現在の研究のフロンティアが提示された。次に第二報告として高木恒一会員（立教大学）に、ジェントリフィケーションの構造的要因としての都市政策について、

東京を事例に論じていただいた。最後に第三報告として山本薫子会員（首都大学東京）によって、ジェントリフィケーションの引き起こす社会問題が、バンクーバーの都市下層地域の事例に基づいて検討された。また討論者として、政治経済的な側面を重視した研究を手がけ、人口の都心回帰の調査を進めている丸山真央会員（滋賀県立大学）と、都市のセグリゲーションについて国際比較を行い、特にフランスの都市の状況に詳しい川野英二会員（大阪市立大学）にコメントをいただいた。

ここで特集の各論文の概要を確認しておこう。藤塚論文は、1990年代以降のジェントリフィケーションの研究動向について、論文数の推移や研究対象地域の拡散を分野横断的に概観している。あわせて最初にジェントリフィケーションが問題化した都市であるロンドンについて、そこでいわれるジェントリフィケーションの内実が当初とはかなり変質しつつあることが指摘される。それはフロンティアの地理的拡大、ジェントリファイアーの属性の変化、新築のジェントリフィケーションの顕在化であり、これらは都市政策の影響によるところが大きい。我々の問題関心の出発点においては欧米と日本との対置を前提としていたが、実のところ欧米のジェントリフィケーション論でも進んでいる概念の拡張と地理的拡散とを踏まえた認識が求められているのである。

続く高木論文では、1990年代後半以降の東京を対象に、都心への人口回帰について、国の「都市再生」政策と、東京都の「環状メガロポリス構想」と関連づけて捉え直される。これは著者が1990年代初頭に調査していた都心再開発の事例から、そのコンテクストに大きな変化が進んだことを意味する。ここで描かれた社会－空間構造の転換と1990年代後半以降の東京都心におけるジェントリフィケーションとの結び目にあるのは、社会政策としての側面を後退させながら都心居住が推進される住宅政策である。神宮外苑の国立競技場の建て替えに合わせた都営霞が丘アパートの住民立ち退きは、まさにこの問題領域が顕在化した事態といえよう〔稲葉 2015〕。

最後に山本論文は、バンクーバーの都市下層地域が見せている変化と、そこでの市民運動団体や住民諸階層の対応の多義性を明らかにした事例研究である。この地域では低家賃住宅の減少と中間階級向けの商店や飲食店の新規開業が進んでいるが、それらはまぎれもなくジェントリフィケーションとして告発される対象である。同時に、地域経済の活性化による住民の雇用創出につながるチャンスとして期待されるところもあり、その評価をめぐって運動団体や住民間で亀裂が露わとなった。地域経済の活性化は、地域に住む最も困難な人々の排除につながらない形態で実施することが果たして可能なのか。模索が続けられているなかで、ジェントリフィケーションへの対抗は多様化している。

以上の諸論考が追究している問題について、既存のジェントリフィケーション論と対比して位置づけてみたい。ジェントリフィケーションが起きる過程の説明として、現在最もオーソドクスな位置づけにあるのは、ニール・スミスの地代格差論であろう〔Smith 1996 = 2014〕。スミスは都市空間の変動を資本蓄積過程として捉え、ジェントリフィケーショ

ンを説明する要因として、インナーシティで生じた地代格差に着目している。地代格差は、土地・建物が適切に利用されている時に得られるはずの地代と実際の地代とのギャップがある状況で、それが投資のチャンスとして認識される。ジェントリフィケーションは、他の投資先の利潤率が低下したタイミングに、このギャップが十分に拡大している場所において誘発されるのである。まず考えておかねばならないのは、ここで地代格差が生じる場所についての理解だ。初期になされた研究の多くは、インナーシティに地代格差を見出してきた。その認識は、脱工業化が進んでいた当時の英語圏における都市の空間構造に根差している。しかし藤塚論文が示すように、ジェントリフィケーションが進むことによって都市の空間構造が変わり、そのフロンティアもまた当初から大きく移り変わっている。ここで思い起こされるのは、テーマ部会の当日の議論で討論者の丸山会員が指摘した、ジェントリフィケーションという概念を導入することの認識利得を明確にする必要性である。これについて高木会員からは、コミュニティ研究では前提として以上には焦点化されることの少ない、都市の空間構造の変化を問題にする点にあると強調された。さらにいえばそれは、藤塚氏が明らかにしたように社会階層的に構造化された都市空間である。そして、空間構造がどのように社会構造とつながっているのかは都市によって様ではない。ジェントリフィケーションの発現形態は、このような都市の社会構造と空間構造の結びつき方によって変わってくる。高木論文が促す住宅政策の検討は、東京を対象とした研究におけるこの両者の結びつき方の解明に関わってくるのである。

加えてもうひとつ重要なのが、各都市に固有の地域政治のコンテキストを議論にどのように組み込むかという問題である。特に注目したいのは、山本論文が分析しているような、ジェントリフィケーションへの対抗運動の持つ意味である。当日の議論で討論者の川野会員から指摘されたように、そもそもジェントリフィケーションが認識され、社会問題として成立するかどうかは、社会運動のつくりだす文脈に依拠している。ジェントリフィケーションは、住民の追い出しや地域社会の崩壊を不当と捉え、抵抗が組織化されるときに、告発のための用語として用いられてきた。たとえばフランスでは長く、ジェントリフィケーションにあたる事実に対しては、*embourgeoisement* という用語が使われていた。しかしこの言葉には労働者階級の地域住民の富裕化というニュアンスも含まれ、告発やそのための分析に使える概念ではない。そのために近年は、ジェントリフィケーションという英語が急速に普及したのである。

これらを踏まえると、日本の都市社会学でジェントリフィケーションが争点としては不在に見えた状況も、実は同様の問題関心に基づきながら、異なる概念や理論的・社会的文脈を前提にした経験的研究が続いてきた可能性もある。日本におけるジェントリフィケーションを理解するには、日本の都市構造再編について1980年代までさかのぼり、それをめぐる当時の政治的争点の浮かび上がり方や、各種言説の布置状況も含めて再検討する必要があるだろう。これは引き続き次年度のシンポジウムのテーマとして取り組んでいくこ

ととしたい。

参考文献

- 原田 謙, 2015, 「特集解題：都市中間層と居住空間の再編」『日本都市社会学会年報』33：1-4.
稲葉奈々子, 2015, 「東京オリンピックと都営霞が丘アパート」『寄せ場：日本寄せ場学会年報』
27：61-75.
Smith, Neil, 1996, *The New Urban Frontier: Gentrification and the Revanchist City*, Routledge. (=原
口剛訳, 2014, 『ジェントリフィケーションと報復都市』ミネルヴァ書房.)

(しもむら やすひろ／玉川大学リベラルアーツ学部准教授)